筑紫女学園大学リポジト

Gérard de Nerval et Célestin Nanteuil

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/211

ジェラール・ド・ネルヴァルとセレスタン・ナントゥイユ

間　瀬　玲　子

Gérard de Nerval et Célestin Nanteuil

Reiko MASE

Ⅰ．序

19世紀フランスの作家ジェラール・ネルヴァル Gérard de Nerval と画家セレスタン・ナントゥイユ Célestin Nanteuil との交友関係はネルヴァルが20代の頃から亡くなる時まで断続的ではあるが生涯続いた。ネルヴァルの伝記には必ず登場する画家でありながら、ナントゥイユの版画を見ることは容易ではなかった。近年ナントゥイユが挿絵を描いた書籍及び雑誌が電子テキストとして流通するようになり、それに伴い関係古書も容易に入手できるようになった。これを機にネルヴァルとナントゥイユの交友関係を版画を中心主題にして考察したいと考えるようになった。(1) なおフランス語による新たな文献があるわけではなく、過去に発表された研究論文及び研究書を参考に考察した。

Ⅱ．ナントゥイユについて

画家ナントゥイユはどのような人物であったのだろうか？『19世紀ラルース百科事典』*Grand Dictionnaire universel du XIX^e^ siècle*には以下のように記載されている。

> Nanteuil (Célestin), peintre et lithographe français, né à Rome en 1813, de parents français, mort à Marlotte en septembre 1873. (2)

ナントゥイユ（セレスタン）、フランスの画家で石版画師、両親はフランス人、1813年ローマで生まれ、1873年９月にマルロット（パリ郊外のフォンテーヌブロー近くの小さな村の名前）で亡くなった。

同百科事典にはナントゥイユが当時の作家であるヴィクトル・ユゴー Victor Hugo 、アレクサンドル・デュマ Alexandre Dumas、テオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier などの作品の挿絵を手掛けていたことが記載されている。後年ディジョンの美術館と美術学校に勤務することになる。ナントゥイユの基本情報はこれで足りるが、もっと専門的な事項は愛書家の王と言われたアンリ・ベラルディ Henri Béraldi『19世紀の版画家たち』*Les graveurs du XIX^e siècle*（1885年～1892年、12巻中の第10巻）に記載されている。(3) ナントゥイユが注目されたのはユゴーの『ノートル・ダム・ド・パリ』*Notre Dame de Paris*（ランデュエルRenduel社刊行）と書かれている。またナントゥイユの版画作品一覧が収録されており、驚くほど多数の作家、音楽家の作品に挿絵を提供したことが理解できる。本論文執筆の際に随所で参考にした。

時代は多少遡るが19世紀の作家テオフィル・ゴーチエはネルヴァルの友人であると同時に、ナントゥイユと懇意にしていた。彼が1874年に刊行した著書『ロマンチスムの歴史』*Histoire du romantisme* においてナントゥイユに１章を割いて詳細に記述している。この記述が現在までナントゥイユの評価に色濃く反映している。重要な箇所を引用してみよう。

> Elias Wildmanstadius était le symbole de ces résurrections du passé, mais ce n'était nullement un type de fantaisie. Il nous avait été suggéré par un de nos amis du petit cénacle : Célestin Nanteuil, qu'on eût pu appeler « le jeune homme moyen– âge . » (4)

> エリアス・ヴィルドマンスタディウスは過去のこのような復活の象徴であった。しかし少しも空想の典型ではなかった。「プチ・セナークル」の友のひとり、人々が「中世的青年」と呼ぶことができたセレスタン・ナントゥイユによって私たちに連想させた。

『エリアス・ヴィルドマンスタディウス 、あるいは中世男』*ÉLIAS WILDMANSTADIUS ou l'Homme Moyen Âge* はゴーチエの作品『若きフランスたち』*Les Jeunes -France* の１章のことである。(5)『若きフランスたち』は1833年にランデュエル社から出版された。挿絵をナントゥイユが書いている。つまりナントゥイユは自分をモデルにした『エリアス・ヴィルドマンスタディウス 、あるいは中世男』が収録されている『若きフランスたち』の挿絵を担当したことになる。ナントゥイユがどの程度意識していたかについて正確なことはわからないが、多少は意識していたかもしれない。またプチ・セナークルは1830年代にネルヴァルとゴーチエなどが結成したグループである。この引用文により ナントゥイユ＝中世的青年という固定したイメージが出来たことは否定できない。ただしこの中世が何を意味するのかは考察すべき余地がある。

またゴーチエは別の箇所でナントゥイユの挿絵を次のように評価している。

> Il excellait aussi à encadrer des personnages de poëme, de drame et de roman, dans des ornements semblables à des châsses gothiques.... (6)（引用文ではpoèmeではなくpoëmeと

表記している）

彼はこのように詩、劇、小説の主人公をゴチック式の聖遺物箱に似た装飾の中に囲むことにかけては追随を許さなかった。

後で詳しく検討をするが、ゴーチエが指摘しているようにナントゥイユの挿絵のいくつかの特徴のひとつが絵を箱のようなもので分割し、そこに登場人物を描くことである。また登場人物には説明も書かれていて、見る者の目を楽しませてくれる。

ゴーチエの『ロマンチスムの歴史』は今でも色褪せてはいない。ゴーチエはナントゥイユの近くにいた人物であり、その誠実さ故にその記述を覆すのは非常に難しい。この点は注意をしなければならないと考えている。

またネルヴァルの伝記を執筆したことでも有名なアリスチード・マリー(7)による『ロマン派の版画家、セレスタン・ナントゥイユ、画家、エッチング画家、石版画家』*Un imagier romantique, Célestin Nanteuil, Peintre, Aquafortiste et lithographe*（1910年）が現在でもフランス語で読める最も充実した伝記であることは否定しようがない。(8) 後に詳述するがこの伝記には重要な図版が掲載されている。その中でも特筆すべきものは、ネルヴァルが私財を投げ打って創刊した雑誌『演劇界』*Le Monde dramatique* の1835年第１巻に掲載された挿絵である。この挿絵に関しては後に詳しく論じたいと考えている。ナントゥイユは、画面を箱で区切り、各々の箱の中に登場人物を描いている。(9)　もう一枚はネルヴァルが亡くなった場所であるパリのヴィエイユ・ランテルヌ通りrue de la Vieille Lanterneを描いた絵である。(10)　この版画についても後に詳しく論じる考えである。さてマリーはこの書物の改訂版を *Célestin Nanteuil*、*Peintre, Aquafortiste et lithographe*『セレスタン・ナントゥイユ、画家、エッチング画家、石版画家』として「ロマン主義の人生と芸術」（La vie et l'Art Romantiques ）シリーズの１巻として1924年に刊行した。判型、ページ数も違い、収録されている挿絵が違う場合があるので参考文献として参照する場合に注意を要する。(11)

以上のようにナントゥイユの人生とその業績を簡単に記述した。本論文ではネルヴァルとナントゥイユ、とりわけナントゥイユが描いた版画との関わり方に論点を絞りたいと考えているので、彼の画業についてここでは詳しくは触れない。

Ⅲ．ナントゥイユに関するネルヴァルの言及

ネルヴァルが作品内や書簡で言及している箇所は意外と少ない。その数少ない記述の中からナントゥイユの版画と深く関わる箇所を考察してみよう。まず1834年11月にマルセイユからランデュエル宛に書簡を出している。この書簡の中には「デュセニュールまたはゴーチエまたはナントゥイユ」宛ての書簡が入っており、ランデュエルに３人のいずれかに書簡を転送してほしいと書

いている。ウージェーヌ・ランデュエルEugène Renduel はロマンチスムの時代に活躍した出版関係者である。すでに言及したようにユゴーの『ノートル・ダム・ド・パリ』（1832年）とゴーチエの『若きフランスたち』（1833年）はランデュエル社から刊行されている。ネルヴァルのプレイヤッド版の編者が指摘しているように[12] アドルフ・ジュリアン Adolphe Julien が彼の著書の中でネルヴァルのこの２通の書簡を引用している。[13]　この２通の書簡が重要なのはその内容だけではなく、1834年当時のネルヴァルの親密な交友関係の一端を知ることができるからである。この時期ネルヴァルは祖父の遺産を相続し、南フランス・イタリア旅行に出かけた。旅行後に海路でマルセイユに到着し、上記の手紙を出している。ランデュエル宛ての書簡に同封された書簡の宛名の一人であるデュセニュール（ Duseigneur, Jean ou Jehan）は彫刻家であり、1831年にネルヴァルのメダイヨン（大型メダル）を作成した人物である。パリの４区にあるサン・ジャック塔 Tour Saint-Jacques を中心にしたサン＝ジャック小公園 Square Saint-Jacques にネルヴァルの円形肖像と碑文がある。肖像はデュセニュールのメダイヨンをもとにしており、碑文にはネルヴァルの最も有名な詩のひとつ「廃嫡者」« El Desdichado » が刻まれている。若き日の凛々しいネルヴァルを想起させる貴重な記念物であり、数々の研究書に掲載されている。さてネルヴァルが３人に宛てて手紙の中でナントゥイユに関係のある箇所は以下の文章である。

Ah ! que Nanteuil pense donc aux deux derniers volumes et à *Ashévérus*. J'ai vu ses vignettes à Florence et à Naples, et partout. [14]

ああ、ナントゥイユが最近の二巻本と『アシェヴェリュス』のことを考えてくれるように。私は彼の版画をフィレンツェ、ナポリの至る所で見た。

上記の引用の前後にナントゥイユに関係する箇所があるわけではない。これだけの文章によってネルヴァルの意図するところが正確に伝わるとは思えない。プレイヤッド版の編者は「*Ashévérus* は *Ahasvérus* が正しい綴りで、エドガール・キネ Edgar Quinet の演劇のことであり、主人公は彷徨えるユダヤ人である」ことを指摘しているだけである。『アアスヴェリュス』の彷徨えるユダヤ人はネルヴァルの興味を引いたことは間違いないが、手紙文としてはかなり不完全である。またナントゥイユの版画がイタリアの各地で見ることができたことは彼の当時の人気の高さを物語っているのであろう。また場合によっては正当な手段を取らずに版画が市場に出回ったのかもしれない。

その後長くネルヴァルがナントゥイユと直接接触した形跡はない。以下の引用文は『ボヘミヤの小さな城』*Petits châteaux de Bohême* の１章「ドワイエネ街」La rue du Doyenné の一節である。『ボヘミヤの小さな城』は雑誌掲載を経て1853年に書籍として発表された。

Vers cette époque, je me suis trouvé, un jour encore, assez riche pour enlever aux

démolisseur et racheter deux lots de boiseries du salon, peintes par nos amis. J'ai les deux dessus de portes de Nanteuil ... [15]

その時期には私はかなり金持ちで、依然として一日だけだったが、友人たちが書いた広間の板張り一式を二つ解体業者から取り上げ、買い戻すことができた、私はナントゥイユの扉の上部を二つ持っている。

『ボヘミヤの小さな城』の章の題名であるドワイヤネ街でネルヴァルたちが画家カミーユ・ロジエ Camille Rogier（1810～1896）の家で「粋な放浪生活」と呼ばれる共同生活を始めるのは1835年のことである。ロジエは生涯にわたってネルヴァルと深く関わる画家である。[16] この引用文の次に所有するものが次々と登場する。まず画家シャルル＝エミール・ヴァチエ Charles-Emile Wattier の署名入りのヴァトーである。ヴァチエは18世紀の画家アントワーヌ・ヴァトー Antoine Watteau（代表作は「シテール島への巡礼」ルーヴル美術館所蔵）から大いにインスピレーションを得ていた。本物のヴァトーの絵画という意味ではないと考えられる。次にプロヴァンス地方の二つの「風景」を描いたカミーユ・コロー Camille Corot の２枚の長い羽目板である。コローはあまりにも有名なので、プレイヤッド版の編者は全く注をつけていない。[17] 画家オーギュスト・ド・シャチオン Auguste de Châtillon の「赤い修道士」も言及されている。またテオドール・シャセリオー Théodore Chassériau の「バッカスの巫女たち」とロジエの２枚の窓間壁も言及されている。ネルヴァルがどのような画家を好んでいたのかもわかるし、画家たちが通常の絵画ではなく、部屋の中の板切れに絵をかいていたことも理解できる。またネルヴァルと画家たちの交流関係がこの文章から理解できる。ネルヴァルの追憶の彼方にある芸術のかけらともいうべき諸作品のひとつがナントゥイユの扉の上部であったことはしっかりと記憶すべきことである。

最後に紹介するのはネルヴァルによる1853年11月14日付のアレクサンドル・デュマ宛ての書簡である。ネルヴァルがデュマに対して20年間の長きにわたって抱いていた複雑な感情を吐露した手紙である。

... j'occupais l'ancien appartement du Doyen, dont j'avais fait restaurer le salon et repeindre — par Châtillon, Nanteuil, Wattier, Corot, Chassériau et autres de mes amis — les dessus de portes et les trumeaux. [18]

私は首席司祭の旧居に住んでいました。その客間を修復させ、シャチオン、ナントゥイユ、ヴァチエ、コロー、シャセリオーや私の友人たちの他の人たちにドアの上部や窓間壁を描き直してもらいました。

この書簡は明らかにすでに引用した『ボヘミヤの小さな城』の引用文と呼応する内容である。赤いインクで書かれた支離滅裂の手紙に列挙された画家たちの名前はとても重要である。ネルヴァルが20年も前に親しくし、記憶の奥に深く沈んでいた画家たちがまさに表面に浮かび上がってくるのを感じさせる証言である。

以上のようにネルヴァルはナントゥイユに関して言及した箇所は驚くほど少ない。しかしその少ない証言の中から読み取れるのは絵を描く人ナントゥイユであり、他の側面ではない。これはしっかりと記しておくべきであろう。

Ⅳ．ナントゥイユの版画とネルヴァルとの関わり

1．演劇専門誌『演劇界』の挿絵

この項目ではナントゥイユがネルヴァルのためにどのような挿絵を描いたかを考察してみよう。ネルヴァルは母方の祖父の遺産をもとに1835年に演劇雑誌『演劇界』*Le Monde dramatique* を創刊した。この雑誌のせいでネルヴァルは大きな損失を被ったことはつとに有名な話であり、ここではその点を考察することは控えたい。フランス国立図書館電子テキストサイトGallicaに1835年第１巻が収録されている。(19) たとえ電子テキストであったとしても実際にこの第１巻を見ると、手間とお金がかかり、それがネルヴァルに多大な負債を抱えさせたことがよく理解できる。ナントゥイユの扉絵にはあまりに多くの人物が描かれており、多少ごてごてした印象を与えている。登場人物の下には人物名ではなく、国の名前が書かれている場合がある。友人ネルヴァルが始めた『演劇界』の創刊号の扉絵ということもあり、張り切り過ぎたのではないであろうか？(20) この創刊号には他にもナントゥイユの挿絵が収録されている。まずナントゥイユのかなわぬ恋の相手と言われていた女優マリー・ドルヴァル Marie Dorval がコメディ・フランセーズで上演された『アンジェロ』*Angelo*（ヴィクトル・ユゴー作の散文劇）で演じたカタリーナ・ブラガルディーニ Catarina Bragardini を描いた挿絵がある。(21) ナントゥイユが恋い焦がれた女性にしてはあまり美しく描かれてはいない。次に「呑気な子供たちの演劇」*Théâtre des enfants sans souci* と題した記事の上に挿絵がある。《呑気な子どもたち》は中世において世俗劇を演じた組合のひとつの名前である。(22) この挿絵に描かれた人物たちはナントゥイユの画風独特の顎のラインが尖っている。台の上にいる人物たちは独特の帽子と服装をしている。それを観客たちが不思議そうな顔をしてみている。最後が『ドン・ジュアン・ドートリッシュ』（カジミール・ドラヴィーニュ Casimir Delavigne作の劇）第４幕である。女性が、剣を持って襲いかかろうとしてくる男性から別の女性を守るという勇ましい姿を描いている。しかしこれも登場人物の顔が細く描かれており、すっきりとした印象を与えている。(23) ナントゥイユが描いた『演劇界』の扉絵は多くの研究書において紹介されてきた。それ以外では「呑気な子供たちの演劇」に使われた挿絵が「ネルヴァル補遺全集」*Œuvres complémentaires de Gérard de Nerval* 第６巻の表紙に

使われたぐらいだと考えられる。この第６巻には『阿呆の王』*Le Prince des Sots* が収録されている。[24]

『演劇界』1835年第２巻にもナントゥイユは挿絵を提供している。第２巻もGallica から電子テキストを入手した。ナントゥイユの１枚目は「リュターの時代の家族」（ドラヴィーニュ作の劇）である。２号ともなるとナントゥイユにも疲れがでたのか全体の出来が雑である。[25]　もう一枚は『マラーナのドン・ジュアン』（アレクサンドル・デュマの演劇）である。こちらのほうがひとりひとりの登場人物の表情がわかり、親しみを感じることができる。[26]　『演劇界』の電子テキストはナントゥイユの挿絵研究にって大きな役割を果たしているが、この時代にどのような演劇が上演されたかを知る大きな手掛かりを提供してくれる。しかも舞台上の様子を想像させてくれるのは大きな収穫だと考える。

２．楽譜『レノーレ』（『レノール』）の挿絵

次はネルヴァルの翻訳作品にナントゥイユが挿絵を描いた例を言及してみよう。ドイツの作家ビュルガー Bürger 作、ネルヴァル訳モンプー Monpou 音楽の『レノーレ』（フランス語読みすると『レノール』）の挿絵をナントゥイユとカミーユ・ロジエが担当して1833年に挿絵付楽譜が刊行された。現時点では電子テキストの存在を確認できなかったので、フランス国立図書館からコピーを取り寄せて分析作業を行った。[27]　『レノーレ』は戦争から戻らない恋人を待つレノーレが神を呪うと、恋人が彼女を連れに来て馬にのせる。しかしその恋人は死霊であったという話である。この楽譜には挿絵が収録されている。表紙のページの版画には著者のサインがない。ガリマール社から刊行された『アルバム　ジェラール・ド・ネルヴァル』*Album Gérard de Nerval* の編者も挿絵画家が誰であるかについて明言を避けている。次の版画には明らかにナントウイユと大きく署名と1833年という年号が書かれている。この版画にはヒロインのレノーレが数多くの兵士たちに語りかけている。レノーレは後姿が描かれているので顔の表情は見えない。右端には馬に乗った全身真っ黒な兵士が描かれている。真っ黒な兵士の出現に数多くの兵士たちは恐れている様子はない。それが死霊となったレノーレの恋人である。３枚目はカミーユ・ロジエの版画である。フランス国立図書館から取り寄せたコピーよりも上記の『アルバム　ジェラール・ド・ネルヴァル』に掲載された図版のほうが明瞭である。右下にロジエの署名と1833という年号が記されている。戻ってきた恋人がレノーレを馬にのせている。明瞭な図版のおかげでわかったことは、全身真っ黒な兵士はマントではなく、甲冑をまとっていることである。また挿絵の下部には髑髏や骨がごろごろしている。ナントゥイユとロジエの挿絵を比較すると、ロジエのほうに軍配があがると考えられる。ロジエの挿絵の中のレノーレは斜めから見た姿を描いているので、その表情がよくわかる。恋人とともにいる喜びと何かしら不安も入り混じった複雑な表情がよくわかる。馬はへとへとに疲れ果てている。また下部の骸骨や骨は明らかに死を象徴している。このように二人の挿絵画家の競作は読者が比較検討をしてしまうので厳しい仕事ではある。[28]

３.「ヴィエイユ・ランテルヌ通り」の版画

最後はネルヴァルの死後ナントゥイユが描いたヴィエイユ･ランテルヌ通りの版画である。数多くの研究書に収録されている有名な版画である。近年初出雑誌である『アルチスト』L'*Artiste*の電子テキストが Gallica に収録されたのでダウンロードをして確認を行った。1855年１月26日の朝､ネルヴァルはヴィエイユ･ランテルヌ通りで縊死体として発見された｡1855年２月18日号の『アルチスト』誌にナントゥイユはヴィエイユ・ランテルヌ通りを描いた版画を掲載した。それまでに見た彼の挿絵や版画とは似ても似つかないぼやっとした絵である。薄ぐらい通りと建物そしてその先のほのかな明かりしか描かれていない。「ネルヴァルはもういない」ということをナントゥイユは表現したのだろう。ナントゥイユは言葉ではなく版画で弔意を表したと言える。(29)

Ⅴ．ネルヴァルが参照したと考えられるナントゥイユの版画

最後にネルヴァルが作品執筆に際して参考にした文学作品の中でナントゥイユが挿絵を描いた作品を考察したいと考える。最初は16世紀のイタリアの詩人タッソが書いた『解放されたエルサレム』について考察してみよう。以前筆者は『解放されたエルサレム』がネルヴァルに与えた影響について多少論じたことがある。(30) ネルヴァル自身が『解放されたエルサレム』について言及をしていることは確かである。かなり以前であるがイタリアのネルヴァル研究者マリア・ルイザ・ベレーリ Maria Louisa Belleli がジャン・リシェ編の『オーレリア』*Aurélia* 注釈版においてフィリポン・ド・ラ・マドレーヌ Philipon de la Madeleine が『解放されたエルサレム』を翻訳し、マレ社から1841年に出版された本を紹介した。(31) この翻訳にはナントゥイユとバロンBaronの挿絵が掲載されている。(32) バロンはアンリ・バロン Henri Baron という名前で、ナントゥイユと共同制作を行っていた。バロンはナントゥイユの追随者である、この二人は、二人のイニシャルを合体させたマークを署名として使っていた。『解放されたエルサレム』はもともと韻文で書かれた作品である。それをフィリポン・ド・ラ・マドレーヌが散文の形式で翻訳をしている。ナントゥイユとバロンの共作による挿絵は多数収録されており､読書の助けとなっている。この本にはアルフォンス･ド･ラマルチーヌ Alphonse de Lamartine による「エルサレムの描写」という文章が掲載されている。ネルヴァルがこの翻訳を参照した可能性は極めて高いと考えている。まず豊富な挿絵が掲載され、次に尊敬するラマルチーヌの文章が冒頭を飾っているからである。しかしナントゥイユとバロンの共作の挿絵は毒気がなく、おとなしい印象を与える。

次にネルヴァルが参照したと考えられるのが16世紀イタリアの作家アリオストAriosteの『狂えるオルランド』*Roland furieux* であろう。『解放されたエルサレム』と同様マレ社からフィリポン・マドレーヌ訳によって出版された。(33) こちらの本は『解放されたエルサレム』と違い４人の画家トニー・ジョアノ Tony Johannot、バロン、フランセ Français、ナントゥイユの共作による。表紙には300枚の挿絵と25枚の素晴らしい図版が収録されていることを宣伝している。

25枚の図版は主にジョアノが担当している。残念ながらナントゥイユは控えめな関わり方しかしていない。ジョアノやフランセの挿絵はとても迫力があり、読者を『狂えるオルランド』の中に引きこんでいく。

Ⅵ. 終わりに

以上のようにネルヴァルとナントゥイユの生涯にわたる関係を挿絵や版画をキーワードとして考察した。すでに本論文の随所で記載したようにフランス国立図書館電子テキストサイトGallica及びInternet Arvhiveを中心としてフランス語で書かれた文学作品のみならず、研究書や事典類に至るまで電子テキストで読むことができるようになった。最初にも述べたが、ナントゥイユがネルヴァルと最も深く関わったのはネルヴァルが創刊した『演劇界』にナントゥイユが挿絵を多数提供した時である。『演劇界』が電子テキスト化されたことにより、彼の挿絵も見ることができるようになっただけではなく、当時の演劇界の様子が手に取るようにわかるようになった。そして次に深く関わったと言えるのはネルヴァルが亡くなった後ナントゥイユが『アルチスト』誌に版画を提供したことである。『アルチスト』誌もまた電子テキストで読むことができる。「誰もいないヴィエイユ・ランテルヌ通り」を描いたナントゥイユはやはり並の人ではなかった。寂しく亡くなったことをあれほど雄弁に語る版画は他にはない。

今日セレスタン・ナントゥイユを画家として評価する人は少ないかもしれない。しかしナントゥイユとネルヴァルの関係を挿絵や版画をキーワードで見ると、二人が共同で作り上げた世界はもっと評価されてもよいのではないかと考えている。また過去には容易に見ることができなかったネルヴァルに関わる文学作品、研究書、事典類を電子テキストや廉価版を通して考察できるようになったことは大きな成果を生む可能性を秘めている。『演劇界』の刊行がどうしてネルヴァルを困窮に陥れたかはたとえ電子テキストであったとしても実物を見てみないと実感できない。今後も色々な書物が電子テキストとして公開されることを望まずにはいられない。

注

（1）ナントゥイユに関する日本語の研究書は非常に限られている。武田恒夫、辻成史、松村昌家　編『視覚芸術の比較文化』（大手前大学比較文化研究叢書２）、思文閣出版、2004年に収録された小林宣之「セレスタン・ナントゥイユ　―フランス・ロマン主義期の挿絵画家―」がナントゥイユに関する日本語の文献の中で最も参考になると考えられる。詳細な注や参考文献は注目に値する。また『シュンポシオン ― 高岡幸一教授退職記念論文集 ―』朝日出版社、2006年に収録された小林宣之「ネルヴァルとセレスタン・ナントゥイユ」も重要な文献である。気谷誠『西洋挿絵見聞録 ― 製本・挿絵・蔵書票』アーツアンドクラフツ、2009年、pp.92-95 も参考にした。本文でも言及したナントゥイユが挿絵画家として評価されるきっかけとなったヴィクトル・ユゴーの『ノートル・ダム・ド・パリ』の挿絵が写真つきで紹介されている。また中村真一郎『眼の快楽』ＮＴＴ出版、1996年、pp.10-15

においてナントゥイユとネルヴァルの親交が詩情豊かな文章で綴られている。

（２）Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e^ siècle*, DVD-ROM, Paris, Champion électronique, 2000.

（３）Henri Béraldi, *Les graveurs du XIX^e^ siècle*, tome X , Paris, L . Conquet, 1890, pp.164-188（フランス国立図書館電子テキストサイト　Gallicaより入手）。小林宣之「セレスタン・ナントゥイユ ― フランス・ロマン主義期の挿絵画家 ―」（前掲論文）p.158で紹介されている。気谷誠『西洋挿絵見聞録 ― 製本・挿絵・蔵書票』（前掲書）においてはpp.305～306以外にも著書の随所でアンリ・ベラルディの『19世紀の版画家たち』が紹介されている。本文中で言及したユゴーの『ノートル･ダム･ド･パリ』はランデュエル社から出版された全集の１巻である。ランデュエル社の『ノートル･ダム･ド･パリ』（1832年）は未見である。ただしナントゥイユの版画が収録されているVictor Hugo, *Notre Dame de Paris*, ［Paris］, Hugues, ［1876-1877］ を見ることができた。

（４）Théophile Gautier, *Histoire du Romantisme, suivie de Notices romantiques et d'une étude sur la poésie française,* 1830-1868, troisième édition, Paris, Charpentier, 1877, p.53. 上記の電子テキストサイト Gallicaには1874年初版本の電子テキストが収録されている。この原書には挿絵は１枚もない。引用文に関して筆者が参照した第3版と初版（電子テキスト）を比較したが、差異はなかった。引用を翻訳する際にゴーチエ著、渡邊一夫訳、中島健藏著『ロマンチスムの誕生（ゴーチエ）、ロマンチックについて』青木書店、ふらんすロマンチック叢書、昭和14年に収録された「ロマンチスムの誕生」の翻訳を参考にした。この翻訳には原書とは違い、何枚かの版画が説明つきで掲載されており、本論文執筆に際して参考にした。挿絵と挿絵の説明文に齟齬が生じている箇所もあるが、その点も今後の研究の材料としたいと考えている。すでに紹介した気谷誠『西洋挿絵見聞録 ― 製本･挿絵・蔵書票』p.92に『ロマンチスムの誕生（ゴーチエ）、ロマンチックについて』の表紙にナントゥイユの版画が掲載されていることが記述されている。またテオフィル・ゴーチエ著、渡邊一夫訳『青春の回想 ― ロマンチスムの歴史 ―』冨山房、冨山房百科文庫、昭和52年も参考にした。

（５）Théophile Gautier, *Romans, contes et nouvelles*, tome I, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2002, pp.11-178. プレイヤッド版には原則として図版は収録されない。その原則に従いゴーチエのプレイヤッド版にも図版は収録されていない。日本語訳はテオフィル・ゴーチエ、井村実名子訳『若きフランスたち ― 諧謔小説集』国書刊行会、1999年である。『若きフランスたち』は序文と６つの短編からなる作品集である。Aristide Marie, *Un imagier romantique, Célestin Nanteuil, Peintre, Aquafortiste et Lithographe,* Paris, L. Carteret, 1910, p. 7 にナントゥイユが『若きフランスたち』に掲載した挿絵が収録されている。以後本書をAM10と略す。多数の登場人物が区切られた箱の中に描かれている。人物を表す絵の下には名前が書かれている。特に目立つのは扉絵上部の画家オニュフリユス ONUPHRIUS（「オニュフリユス」の登場人物）と美しいモデルである。その左の男性は甲冑をまとい、右の男性は平服をまとっている。この二人の男性には名前が記されていない。その下には左にあの女 CELLE-LA 、この女CELLE-CI（「この女とあの女」の登場人物）そのすぐ下の段の左はロゼットROSETTE（「ポンスのボール」の登場人物）、右はジャサ

ンタJACINTHA（「オニュフリユス」の登場人物、Cのように見えるがJである）、最下段はドビュロー DEBUREAU（「オニュフリユス」の登場人物、ドビュローは実在のパントマイム役者）が描かれている。欄外にセレスタン・ナントゥイユの署名と1833年が書かれている。あと数か所文字が書かれているが、現物からマリーの著書への転載のせいで判別できない箇所もある。

（6）Gautier, *Histoire du romantisme,* p.57.

（7）ネルヴァルの作品を研究する人たちにとって必見の書がアリスチード・マリーの伝記である。Aristide Marie, *Gérard de Nerval, le poète et l'homme d'après des manuscrits et documents inédits,* Paris, Hachette, 1914. なお Internet Archive（http://www.archive.org ）から電子テキスト（トロント大学所蔵本）を入手することもできる。1914年版の大きな特徴は多数の図版を収録していることである。その中でも特に注目すべき版画はネルヴァルが亡くなった場所であるヴィエイユ・ランテルヌ通りをナントゥイユが描いた版画であろう。ぼやっとした薄暗がりの通りという印象を与えている（p.336）。また同書にはギュスターヴ・ドレGustave Doréが描いた「ヴィエイユ・ランテルヌ通り」も収録されている。この版画は首をつった男や骸骨が描かれていてとても生々しい印象を与えている（p.348）。なお Aristide Marie, *Gérard de Nerval, le poète et l'homme, d' après des manuscrits et documents inédits,* avec une préface par André Billy, Hachette, 1955は1914年版と比較すると収録されている図版もかなり減っているし、図版の目次がない。『ネルヴァル全集　Ⅵ　夢と狂気』筑摩書房、2003年に収録されたアリスチード・マリー、白井恵一訳「ジェラール・ド・ネルヴァル」は1914年版の序章を訳したものである。

（8）参照したアリスチード･マリーの本（前掲書､AM10）は著者マリーがある作家に献呈した本であり、献呈相手の名前を著者が自筆で書いている。Internet Archive にトロント大学所蔵（オタワ大学協力）の電子テキストが収録されている。こちらは300部の中の１冊であり、献呈相手の名前は印刷されている。

（9）AM10, p.43.

（10）AM10, p.89.

（11）Aristide Marie, *Célestin Nanteuil, Peintre, Aquafortiste et Lithographe,* Paris, Floury, 1924. この書籍をAM24 と略す。マリーはフルリー社から「ロマン主義の人生と芸術」叢書として挿絵画家に関する著作を刊行した。1924年に上記のセレスタン・ナントゥイユ、1925年にアルフレッドとトニー・ジョアノAlfred et Tony Johannot（画家、二人は兄弟）、1925年にルイ・ブーランジェ Louis Boulanger（画家）、1931年にアンリ・モニエ Henry Monnier（劇作家・風刺画家・俳優）の合計４冊である。この４冊を比較すると本の装丁はほとんど同じである。

（12）Gérard de Nerval, *Œuvres complètes,* tome I, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1989, p.1943. 以下この巻をPL. Ⅰと略す。

（13）Adolphe Julien, *Le Romantisme et l'éditeur Renduel,* Paris, Charpentier et Fasquelle, 1897, pp.218-230.ネルヴァルのプレイヤッド版の注によるとジュリアンはまず『両世界評論』*Revue des Deux Mondes* 1896年２月１日号に発表し、翌年同じ題名で本として刊行した。Gallica より電子テ

キストを入手した。本書にはゴーチエ、ネルヴァルとランデュエルとの間の『ペリゴールの二人の貴族の色事の告白』*Confessions galantes de deux gentilshommes périgourdins* 出版に関して締結された契約の最後のページが収録されている。なおこの出版計画は実現しなかった。

(14) PL. I , p.1296.　翻訳をする際に『ネルヴァル全集Ⅲ』筑摩書房、1976年に収録された井村実名子訳「書簡」を参考にした。また『ネルヴァル全集　Ⅰ　文壇への登場』筑摩書房、2001年に収録された朝比奈美知子・井村實名子・藤田衆・丸山義博・村松定史訳「書簡　1829年12月―1839年10月―」の翻訳と注を参考にした。PL. I , p.1945の注と比較検討した。

(15) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes,* tome Ⅲ, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1993, p.402. 以下この巻をPL.Ⅲと略す。翻訳をする際に『ネルヴァル全集Ⅰ』筑摩書房、1975年に収録された中村真一郎・入沢康夫訳『ボヘミヤの小さな城』と『ネルヴァル全集　Ⅴ　土地の精霊』筑摩書房、1997年に収録された田村毅訳『ボヘミヤの小さな城　散文と詩』を参考にした。

(16) カミーユ・ロジエはネルヴァルに住居を提供しただけではなく、ネルヴァルの後半の人生にも登場する。ロジエ研究は今度の研究課題としたい。

(17)　ネルヴァルのプレイヤッド版においてネルヴァルがカミーユ・コローについて言及した箇所は数少ない。PL . III の巻末に収録された人物と登場人物の索引のCorot（Camille）には４例しかない。高橋明也『コロー　名画に隠れた謎を解く！』中央公論新社、2008年、p.117の年譜によると、コローは1835年に南フランスに滞在している。またコローはネルヴァルの死後であるが、ネルヴァルと深く関わるパリ近郊の地モルトフォンテーヌを描いた「モルトフォンテーヌの思い出」*Souvenir de Mortefontaine*（1864年）を発表した。この油絵は現在パリのルーヴル美術館に展示されている。この淡い色彩と描かれた風景はネルヴァルの代表作のひとつである『シルヴィー』*Sylvie*（1853年）を想起させる。2008年７月６日BS JAPAN「美の巨人たち」（「コロー　モルトフォンテーヌの思い出」）においてモルトフォンテーヌの映像が放送された。画面からも緑豊かな自然を感じ取ることができる。

(18) PL. III, p. 823. 翻訳をする際、『ネルヴァル全集　Ⅲ』1976年（前掲書）と『ネルヴァル全集　Ⅵ　夢と狂気』筑摩書房、2003年に収録された朝比奈美知子・井村實名子・田村毅・丸山義博訳「書簡　1853年１月―1855年１月―」を参考にした。

(19) *Le Monde dramatique, revue des spectacles anciens et moderne,* Paris, 1835-1841. この雑誌は週刊誌であった。随所に書かれた日付と値段が週刊誌であることを思い出させてくれる。ネルヴァルが主宰したのは最初の２巻だけであると言われている。第１巻の電子テキストは530ページ程度である。この巻をMDIと略す。

(20) MDI の13 / 530。該当する箇所にはページは記載されていない。

(21) MDI の42/530。

(22) MDI, p.217（265/530）.　川那部和恵「フランス15 ～ 16世紀の演劇状況 ―世俗劇の上演劇場―」『奈良教育大学紀要』第57巻、第１号（2008年）、pp.191-198にフランスの中世末からルネサンス初期の世俗劇の状況が詳しく述べられている。この論文において使われている「呑気な子どもたち」とい

う表現を使うことにした。

(23) MDI の421/530。

(24) *Œuvres complémentaires de Gérard de Nerval, VI, Le Prince des sots,* Paris, Minard, 1960の表紙の図版。編者はジャン・リシェ Jean Richer である。なおこの『ネルヴァル補遺全集』第６巻のp.XXXⅢにナントゥイユが描いた『阿呆の王』のために描いたと推定される挿絵が掲載されている。この挿絵の上部には MAISON DES ENFANTS SANS SOUCY（呑気な子どもたちの家、なおSOUCI ではなくSOUCYと表記）と書かれている。また中央より少し右には Le Prince des Sots（阿呆の王）と書かれている。台の上には世俗劇を演じている人たちがいる。台の下にはその演劇を見る大人たちと子供たちがいる。そこで問題なのは上記のマリーの著作であるAM24の20ページの次のページによく似ているが多少違う図版が収録されていることである。違いは中央より少し右に Le Prince des Sots ではなくデュマからジャナンへの献呈を表す文章が書かれている。AM24 の84ページには「呑気な子どもたちの家、ペンで書かれたデッサン、アレクサンドル・デュマからジュール・ジャナンへの自筆献呈つき。縮小。アリスチード・マリー所蔵」という注が書かれている。現時点ではこの二つの図版の違いの謎は解けてはいない。

(25)『演劇界』1853年第２巻は電子テキストで513ページ程度である。扉絵は『ボヘミヤの小さな城』で登場したエミール・ヴァチエが描いた。この巻をMDⅡと略す。「リュターの時代の家族」はMDⅡの403/513。

(26) MDⅡの429/513 である。『演劇界』第２巻には「ポルト・サン・マルタン劇場　マラーナのドン・ジュアン」*Porte-Saint-Martin : Don Juan de Marana* という劇評が掲載されている（MDⅡの445-447/513）。『ネルヴァル全集Ⅰ』（前掲書）に井村実名子訳・註に『マラーナのドン・ジュアン』が収録されているので参考にした。

(27) Bürger, *Lénore*, traduction de Gérard, mis en musique par Hippolyte Monpou, [Paris], Romagnesi, 1833. なお Gérard de Nerval, *Lénore et autres poésies allemandes*, Paris, Gallimard, coll. «Poésie», 2005, pp.357-358によると『レノーレ』には8つの翻訳があり、編者はこの翻訳を別格と位置付けている。

(28) *Album Gérard de Nerval*, Paris, Gallimard, 1993. 同書の55ページに扉絵の版画が掲載されており、264ページにこの版画の説明が「J. Goddé かC.Nanteuil のサインがない表紙のページ」と書かれている。54ページにはカミーユ・ロジエの版画が掲載され、264ページに注がある。文芸評論家シャンフルーリChampfleury は彼の著作『ロマン派の版画』において、『レノーレ』の扉絵の作者はJ・ゴッデであると明記している（Champfleury, *Les vignettes romantiques,* Paris, Dentu, 1883, p.63.）。Galliaから電子テキストを入手した。ゴッデ作画説に関しては今後も検討を重ねる必要がある。

(29) L'*Artiste*, janvier, février, mars, avril 1855 . 電子テキストは全部で315ページである。ナントゥイユの版画は139/315に掲載されている。

(30) 間瀬玲子「ネルヴァルとアタナシウス・キルヒャー」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第６号（2011年１月）、pp.103-114.

(31) Gérard de Nerval, *Aurélia*, Paris, Minard, 1965, p.19.

(32) *La Jérusalem délivrée*, traduction nouvelle et en prose par M. V. Philipon de la Madeleine, augmentée d'une description par M. de Lamartine, édition illustrée par MM. Baron et C. Nanteuil, Paris, Mallet, 1841. この本には著者名は明記されていない。タッソ著、A．ジュリアーニ編、鷲平京子訳『エルサルム解放』岩波書店、岩波文庫、2010年を参考にした。

(33) Arioste, *Roland furieux*, traduction nouvelle en prose par M.V. Philippon de la Madeleine, traducteur de la *Jérusalem délivrée,* etc., etc. Edition illustrée de 300 vignettes et de 25 magnifiques planches tirées à part sur chine par MM. Tony Johannot, Baron, Français et C. Nanteuil, Paris, Mallet, 1844. 邦訳はアリオスト著、脇　功訳『狂えるオルランド』(上)(下)、名古屋大学出版会、2001年。この翻訳にはギュスターヴ・ドレの挿絵が収録されている。

注記：本論文は平成23年度科学研究費補助金基盤研究（C）「ネルヴァルにおける視覚芸術と文学作品の関係」(課題番号　21520359）の研究成果の一部を公表したものである。

（ませ　れいこ：英語メディア学科　教授）